

後期：アジアのキリスト教思想

A. 日本のキリスト教思想

1. 植村正久 2. 海老名弾正 3. 内村鑑三 4. 内村鑑三と無教会
5. 京都学派とキリスト教思想 11/6

B. 研究発表

6. 研究発表 1 (齋藤、山田) 11/13 7. 研究発表 2 (岡田、長原) 11/20
8. 研究発表 3 (張、田中) 11/27

C. アジアのキリスト教思想

9. 韓国キリスト教 12/4 10. 民衆神学 12/11 11. 中国キリスト教 12/18
12. キリスト教と土着化論 13. インドのキリスト教アシュラム 1/8
14. ピエリスの解放の神学 1/15 15. インドネシアのキリスト教 1/22

A. 日本のキリスト教思想

<前回>内村鑑三

- ・官僚→教育者→ジャーナリスト→伝道者
- ・二つのフロント=2つのJ → 非戦論・愛国、日本的キリスト教

(1) 非戦論と愛国のメタファー化

1. 二つのJ

- ・愛国者としての出発、しかし、不敬事件 (1891 年 1 月 9 日)。
- ・その後、非戦論を展開。同時代の民族主義としばしば軋轢を起こしながら、近代日本の戦争政策を批判しつつ、キリスト者として信仰を貫いた。一見すると、内村は反民族主義者であったかのように見える。しかし、依然として愛国者。

2. 内村が非戦論を唱えるようになった経緯 (1、2、3の三つのステップ)。

- 1) 日清戦争は東洋の近代化のための義戦である (『日本人の天職』(1892 年)、
「日清戦争の目的如何」(1894 年))
- 2) 「<義戦>はほとんど略奪戦に近きものと化し、その戦争の<正義>を唱えた予言者は、今や深い恥辱のうちにあります。」(アメリカの友人ベル宛の書簡)
- 3) 「余は日露非開戦論者であるばかりでない。戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうした人を殺すことは大罪悪である。」(「戦争廃止論」)

3. 問題は、「国あるいは民族を愛する」という場合の「愛」の意味、つまり、愛国とは何か、ということに他ならない。

4. 「二つのJ」の構造。同じレベルでの並置か？

「I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.」。

一定のコンテキストにおける「日本」→通常「日本」(字義的?)からの意味の転換。

↓

日本と明治政府との区別。理想と現実(「日本」の指示の二重化)。

現実の逸脱した民族主義と本来の目指すべき民族主義との二重性が生じる。

5. 現実の日本を批判しうる愛国、批判原理としての宗教(相対化の視点としてのキリスト教):「足尾銅山鉍毒事件は大日本帝国の大汚点なり。」(「鉍毒地巡遊記」)。

6. 愛国の意味転換(=メタファー化):日本の近代化がめざした富国強兵(経済的・政治的軍事的「強国」)から、農業を中心とした非軍事的な小国へ。

7. 「神の国」という尺度を用いた理想的な国家。

民族を超える民族主義(自己超越的民族主義)

cf. 自民族中心主義的排他的民族主義、脱民族的コスモポリタニズム

↓

開かれた形ある隣人愛：神への愛は、具体的な人間関係（隣人愛）において現実化するが、隣人愛の範囲は前もって限定できない。

↓

8. 民族のメタファー化。

1) 民族は虚構である。(第一度の指示の否定)

2) 虚構こそが人間的現実である。(第二度の指示の開示)

9. 家族のメタファー化。

(2) 内村鑑三の日本的キリスト教

日本のキリスト者にとって、日本人であると同時にキリスト教徒であることは、きわめて困難ではあるが、同時に、避けて通れない課題だったのである。この課題への取り組みは、一連の「日本的キリスト教」（日本に土着化したキリスト教）の主張となって現れるが、ここに、鈴木大拙の日本的霊性論と同一の問題意識を読み取ることができる。

9. 内村鑑三の日本的キリスト教に関する発言から。思想的経済的に西欧キリスト教から独立した自由な日本人による日本人のために伝道を行う教会、つまり、内村自身の無教会が目指したキリスト教。

10. キリスト教は外来宗教にとどまらず、日本的となり得る。日本政府がキリスト教を禁止していないのであるから、日本的伝統とキリスト教は両立するといった消極的論拠。

11. 「基督教は亜細亜に起こった宗教でありまして、特に亜細亜人に適する宗教であります」(293)。キリスト教は単なる外来宗教ではなく、日本人の心情に根差したものとなるべきであり、またそうなることは可能であることが帰結する。

12. 内村の日本キリスト教：日本の現実に対する批判性を鮮明に示している。

13. 内村の滅亡予言における日本。足尾銅山事件に現れた富国強兵に奔走する日本。

14. 日本的キリスト教は愛国的使命をもつ。なぜなら、「聖潔の主」を呼び求める日本のキリスト教は、滅ぶべからざる日本を愛する真の愛国者に他ならないからである。

「この海辺、かしの山里に正直にして国を愛する日本国の平民が自由の主なるイエスキリストの名を呼びつつあります」(136)。

15. 日本文化に土着化した日本的キリスト教はキリスト教自体に新しい可能性をもたらす。

16. 日本的キリスト教の使命（天職）＝キリスト教と日本（アジア）、あるいは西洋と東洋とを仲立ち。

自己の存在意味（天職）を「人類—日本—自己」という階層的連関で理解しようとする思考方法。→ I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.

17. 近代日本のキリスト教の二つのフロント

↓

内村鑑三の日本的キリスト教

4. 内村鑑三と無教会——矢内原忠雄の場合

(1) 内村鑑三とその弟子たち

<無教会>

内村鑑三により提唱され、教会によらず聖書本来の信仰のあり方を目指すキリスト教。教団組織、会堂、聖職者を有せず、平信徒の指導者が個人の責任においてキリスト教の集会を主宰する。教会における説教とは異なり、聖書の講解、講義を中心に集まりがもたれ

る。洗礼や聖餐などの儀式は廃し、聖書の釈義を現実の歴史の中に活かそうとする。・・・
 ・ 藤井武、塚本虎二、矢内原忠雄などにより継承・展開され、現在に至る・・・
 (『岩波キリスト教辞典』「無教会主義」より)

1. 「無教会」と云へば無政府とか虚無党とか云ふやうで何やら破壊主義の冊子のやうに思はれますが、然し決して爾んなものではありません、「無教会」は教会の無い者の教会であります、即ち家の無い者の合宿所とも云ふべきものであります、即ち心霊上の養育院か孤児院のやうなものであります、「無教会」の無の字は「ナイ」と訓むべきものでありまして、「無にする」とか「無視する」とふ意味ではありません。」(内村鑑三「無教会論」1901年(『内村鑑三全集9』岩波書店、1981年、71-73頁)、71頁。ルビを省略)
2. 無教会は、「先生と弟子」を核とする集会、雑誌の刊行という二つの活動を中心に展開されたキリスト教運動体。緩やかなネットワークを形成しつつ広範に広がる。世代論。

(2) 矢内原忠雄

<矢内原忠雄> 1893-1961

無教会キリスト者。内村鑑三の弟子、また経済学者。旧制第一高等学校2年生のときに内村に師事。住友鉱業所勤務を経て1920年東京帝国大学助教授、後に教授。新渡戸稲造の後継者として植民地政策を論じた。学問的分析手段としてマルクスの方法を評価、キリスト者としてマルクス主義を相対化した。満州事変、日中戦争を契機に国家批判、37年に学内外から攻撃により辞職(矢内原事件)。この間、29年より土曜日に、33年から日曜日にキリスト教の家庭集会を、49年からの公開講義、死の直前まで継続。第2次世界大戦後は東大に復職、国際関係論。学部長、総長。

(『岩波キリスト教辞典』より)

1) キリスト教と国家

3. 矢内原忠雄は、1937年の『中央公論』9月号に「国家の理想」(『国家の理想——戦時評論集——』岩波書店、1982年 361～384)という評論を発表した。この評論をめぐって、矢内原は十月下旬の経済学部教授会において大学教授としての適格性を問われ、最終的には、依願免官(12月2日付け)という形で、東京帝国大学を去ることになる(同評論集所収の「戦の跡」1945年 497～511)。

4. 平和・正義(理想)の意義。

①現実を批判する視点としての真理・理想

「現実国家の行動態度の混迷する時、国家の理想を思ひ、現実国家の狂する時、理想の国家を思ふ。之は現実よりの逃避ではなく、却つて現実に対して最も力強い批判的接近を為す為めに必要な飛躍である。現実批判の為めには現実の中に居なければならないが、現実執着する者は現実を批判するを得ない。即ち現実によりて現実を批判することは出来ないのである。現実を批判するものは理想である。……理想の高度の高き程、現実批判は強力たり得るのである。」(361)

理想が理想として意味をもつためには、それは現実を高く超えたものでなければならない。平和という宗教の理想は、現実の宗教の限界にもかかわらず、否それだからこそ、いっそう高く掲げられねばならない。

②現実を形成する原理としての真理・理想

理想は現実を超えているとしても、現実と完全に断絶しているわけではない。

まず、個人にとっての理想：それは個人を人間たらしめる「意味、価値、精神」の基底。人間は、一定の価値観に従って現実に働きかけそこに新しい意味を形成する。理想とは、こうした意味、価値、精神を成り立たせ、人間が人間として生きることを可能にする原理。

国家について：国家が国家の名に値するものであるためには、それは国家を形成する形成原理としての理想に基づかねばならない。

「かくして我等が国家の理想として認識するところは、社会的且つ組織的なる原理、換言すれば社会に組織を附与するところの根本原理でなければならない。かかる性質を有する原理は『正義』である。正義とは人々が自己の尊厳を主張しつつ同時に他者の尊厳を擁護する事、換言すれば他者の尊厳を害せざる限度に於て自己の尊厳を主張する事であり、この正義こそ人間が社会集団を成すに就ての根本原理である。……更に具体的に言へば、弱者の権利をば強者の侵害圧力より防御する事が正義の内容である。」(364)

矢内原は、現実の国家を真の国家へと形成する正義の原理とは、具体的に言えば、「対内的には社会正義、対外的には国際正義」(368)であり、それゆえ、「正義原則が発現する形式は平和である」(369)と主張する。つまり、正義の理念の現実化としての平和は、現実の国家にとって必要不可欠。

③現実の政府は真の国家と必ずしも同一ではない

国家が国家の名に値するのは、それが国際平和と国内平和（貧者弱者の保護）という形式において正義の理想を具現しているとき。

→ 国際平和と社会正義に合致しない現実の政府は真の国家ではないことが帰結。

現実の政府がその理想とすべき国家の理想に反するものであるとき、国民はそれに抵抗しなければならない。

現実の政府が誤ったとき、それに抵抗する者こそが、「国家の本質と理想を愛する者、即ち真正の愛国者」(367)だから。正義に反した政策を遂行しようとして、政府が弾圧と宣伝によって人為的に挙国一致を作り出そうとするとき、個人や諸集団は、それに抵抗しなければならない。(内村的愛国心の継承)

そのために必要になるのが、「異論の主張と批判の存在」、つまり言論の自由。

↓

矢内原は、1937年の挙国一致に向かう時代状況に抗して、民主主義の擁護を試みた。

④国家の思想が発見される場としての宗教

「理想は人の心の内部よりの賛成と尊敬とを以て支持せられるを要する。かかる理想発見の努力を、換言すれば純真なる学問及び宗教を、扼殺する社会は、己自身のたましひを扼殺するに等しいのである。」(「社会の理想」同評論集 423)

宗教の存在意義はそれが理想発見の努力を行う点に認められるのであって、矢内原はその実例として古代イスラエルの預言者イザヤを挙げる。イザヤは、エジプトとの軍事同盟によってアッシリアに対抗しようとした政府（国王）に対して、神の正義に基づく平和を主張。イザヤの掲げた正義と平和という理想こそが、バビロン捕囚と民族の離散を超えた「ユダヤ民族の持続性自同性」という「世界歴史上に於ける一の奇蹟的事実」を可能にした(381)。イザヤこそ、「真の愛国者であった」(379)。

↓

問題：キリスト教を含めた現実の諸宗教が、理想発見という宗教的使命を十分に果たしてきたか。宗教の理想と現実の宗教とのギャップが存在する。

「宗教は社会的勢力に対する依存関係を清算し、自己の信仰の純化を計ることによりのみ、宗教それ自身の生命を取り戻し、且つ転換期の社会に対する進歩的貢献を果し得る。

社会は宗教の純粋化を要求するのである。」(422)

2) 日本のキリスト教

4. 『国家の理想——戦時評論集——』

「日本的基督教といふのは、西洋かぶれのしない基督教といふこと」であり、思想的経済的に西欧キリスト教会から自立した日本人による日本伝道を行う教会、つまり、矢内原の師である内村鑑三の目指したキリスト教に他ならない(矢内原、1982、116)。

5. 日本のキリスト教は、「日本人の心によつて基督教を把握するといふ事」(437)。「基督教は日本精神の美点を發揮するものであると共に、其の足らざるを補ひ、及ばざるを純化すべきもの」であつて、「基督教は我が国体に反しないといふことが、基督教会の繰返しての主張であり、又其の実行でもある。私もさう信じる一人である」(118)。

↓

キリスト教は単なる外来宗教ではなく、日本人の心情に根差したものとなるべきであり、またそうなることは可能。というのも、「既に多くの人が指摘してをる通りに、基督教は西洋に伝ひ西洋諸国を真に興した一つの大きな精神力でありますけれども、基督教即西洋ではありません。基督教はアジアから興つたのであります。イエス・キリストはアジア人である。聖書はアジア人の心でなければわからない」(437)、から。大切なのは、「之を私共が欧米人を通して習うのでなしに、日本人の心を以て直接神様から」習うこと。

6. 日本の現実への批判性。

日本的キリスト教はキリスト教を日本主義に同化させるものではなく、あくまで「キリスト教」。矢内原が考える真の愛国は、旧約聖書の預言者イザヤの場合のように、正義と平和という国家の理想に基づいて現実の国家の誤りを批判しつつ表明されるものであつて、「愛と平和と正義の上に立つ民族主義」(325)に他ならない。

矢内原を東京帝国大学教授辞任に追い込むことになる「一先ず此の国を葬つて下さい」という言葉は、「真の愛国」という地点から発せられた。

これは、「国体信仰に封印された閉ざされた愛国心」を批判し、「理想を亡失した現実国家日本の不義」を撃つものと評することができる(大濱、2006、63-64)。

7. しかし。「日本民族は天皇の臣民であると共に、天皇の族員である。之が日本民族の伝統的な民族感情であり、国体の精華である」(矢内原、1982、359)と言ひ得る点で、矢内原の日本的キリスト教は、外来宗教であることを脱却し鈴木大拙の言う日本的靈性の表現となつたキリスト教であると解釈してよい。

8. 日本のキリスト教は、キリスト教自体の新展開。

「それは日本精神の美を發揮し、英米人も独逸人も他の如何なる民族も為し能はざる処の新しい貢献をば、基督教真理の研究と開展に附け加ふる積極的なものでなければならぬ」、「其の意味に於てのみ日本的基督教の運動は、基督教歴史の一大時期を劃するものであり得る」(120)。

日本的キリスト教は、キリスト教の新しい可能性を切り開くものであるとともに、日本が世界に貢献することを可能にする。

「日本的基督教の使命は、第一には、日本人の心によつて基督教の深い真理を、深い深い基督教の真理を新に把握する、新なる角度から把握する、之が第一であります。第二には、斯くして把握したる基督教によつて日本の国を高める事である。さうして日本の国によつて世界を高める事であります。」(438)

↓

日本的靈性とキリスト教との創造的相互作用

9. 内村鑑三の継承者としての矢内原忠雄

<関連文献>

1. 矢内原忠雄『国家の理想——戦時評論集』岩波書店、1982年。
2. 宮田光雄『非武装国民抵抗の思想』岩波新書、1971年。
3. 姜 尚中『愛国の作法』朝日新聞社、2006年。
4. 芦名定道「東アジアの宗教状況とキリスト教——家族という視点から」
『アジア・キリスト教・多元性』（現代キリスト教思想研究会）創刊号、2003年、
1-17頁。
芦名定道「宗教的多元性とキリスト教——東アジアを中心に」（『シンポジウム・グロ
ーバル化時代の人文学——対話と寛容の知を求めて』[京都大学大学院文学研究科、
京都大学 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形
成」]、2007年、39-47頁）。
5. 今滝憲雄「矢内原忠雄——罪人の首と日本国の柱」（芦名定道編『比較宗教学への招待
——東アジアの視点から』晃洋書房、2006年、114-115頁）。
6. 大濱徹也「キリスト者にみる日本への目——矢内原忠雄を場として」、『明治聖徳記
念学会紀要』復刻第43号、2006年、62-71頁。
7. 無教会史研究会編『無教会史 I、II、III、IV、III別冊』新教出版社。
8. 赤江達也『「紙上の教会」と日本近代——無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店、
2013年。